

武蔵野日曜聖書講筵

大悲大慈

――詩篇第32篇――

1976年10月24日

小池辰雄

悔改めの詩篇 十字架の大悲 福音の光で読む いつわりなき者 放蕩息子の譬話 キリスト
の執り成し 聖霊の大慈 図太い信仰 大悲大慈 祈り

【詩篇32】

ダビデの訓諭のうた

1 その愆^{とが}をゆるされ、その罪をおおわれしものは福^{さいわい}なり。
2 不義をエホバに負わせられざるもの、
心にいつわりなき者はさいわいなり。

3 我^{ひねもす}いいあらわさざりしときは

終日^{ひねもす}かなしみさけびたるが故にわが骨ふるびおとろえたり。

4 なんじの手^{みて}は夜も昼もわがうえにありて重し、

わが身の潤澤^{うるおい}はかわりて夏の早^{ひやう}のごとくなれり。

5 斯^{かく}て我なんじの前^{みまえ}にわが罪をあらわし、わが不義をおおわざりき。

我^かいえらく、わが愆^{とが}をエホバにいいあらわさんと。

斯^かるときしも汝^{みづか}わがつみの邪曲^{よこしま}をゆるしたまえり。

6 されば神をうやまう者はなんじに遇^まうことをうべき間^まになんじに祈らん。

大水あふれ流るるとも必ずその身におよばじ。

7 汝^{みづか}はわがかくるべき所なり。

なんじ患難^{なやみ}をふせぎて我をまもり、救のうたをもて我をかこみたまわん。

8 われ汝をおしえ、汝をあゆむべき途^{みち}にみちびき、

わが目をなんじに注^とめてさとしさん。

9 汝等わきまえなき馬のごとく驢馬^うのごとくなるなかれ。

かれらは轡^{くつわ}たづなのごとき具をもてひきとめずば近づきたることなし。

10 悪しき者はかなしみ多かれど

エホバに依頼^{よりたの}むものは憐憫^{あわれみ}にてかこまれん。

11 ただしき者よエホバを喜びたのしめ。

凡てこころの直きものよ、喜びよばうべし。



●悔改めの詩篇

詩篇第32篇は、下からの名としては「悔改めの詩篇」（上からの名としては「罪のゆるしの詩篇」）の第二番目です。即ち、ルターが「ブース・プサルメン」（悔改めの詩篇）を七つあげましたが、最初は第6篇で、その次がこの第32篇になっております。この第32篇を学びましょう。

ダビデの訓諭のうた

と。まあ訓諭おしえといつてもおかしい話です。

詩篇第6篇、32篇、38篇、51篇、102篇、130篇、143篇、これがマルチン・ルターが数えた「悔改めの詩篇」です。

特に32篇は、アウグスチヌスの特愛の詩篇だったということです。彼が死の床において、最初の第1節と2節をラテン語で壁に掲げてじつと眺めたということです。アウグスチヌスは有名な『告白』で言っているように、非常にさ迷い、思想的にも実存面でも、相当に脱線した人ですから、「聖アウグスチヌス」といつて聖者の中に入られていますけれども、彼はそんなことよりも人間、「救われた罪びと」であることを喜ぶでしょう。

アッシジのフランシスにしてもそうです。彼らは自分のことを聖者なんてひとつも思っていない。だから、「聖者せいじや」なんていう言い方は、私はあまり好きじゃない。聖書では「聖者しょうじや」というのはイスラエルの神ヤーヴェーとキリストの他はいない。キリストすらも、

「どうぞ我を善きと言うか」

と、地上におけるキリストは自分を「善人」とも思っていないませんでした。

「その愆とがをゆるされ、その罪をおおわれしものは福さいわいなり。」

私はなぜ、今日は

「大悲大慈たいひたいじ」

とひっくり返して書いたかという、罪のゆるしを「大悲」といいます、私の気持では。大きな憐れみです。こういう仏教的な言い方を大に取り入れたい。神さまのキリストにおける深い憐れみ。これは「ゆるし」という言葉よりも、むしろこの憐れみという言葉の方がもうひとつあたたい、深い気持です。それを大悲といいます。それだから即ち、

「神・キリストの大悲にあつた者はさいわいある」

と。「罪をゆるされ、罪をおおわれしもの」という。どうせ人間は躓いたり転んだり、さまざま、世界の歴史そのものがそうです。

この罪のゆるしが――愆とがでも、罪でもいいですよ、言葉はちがいますが、もちろん、「罪」という言葉の方が総体的な言葉です――一番根底的にはむしろ、

「その愆をおおわれ、その罪をゆるされた」

といった方がもう少し福音的な言い方になります。



●十字架の大悲

罪のゆるしは、仏教的にいえば、その大悲でもって包むんですけれども、私たちには、キリストの大悲は十字架によらなければ罪のゆるしはこない。実力をもっているんです、ゆるしに。

即ち、我々がゆるされるためには、罪がとにかく処分されなければならない。罪の処分は、我々が直接に処分されたら、これはゆるしではないですよ。罪に審さばかれたらおしまいだもの。キリストが審さばきを負ってしまったわけです。この福音の世界は審さばきをいい加減にしているわけではない。審さばきはつきりある。けれども、神さまはその審さばきを我々に向けて、キリストに向けてしまった。

それで、その審さばきを受けたのが十字架で、それは代罰なんです。

「代罰」

というと、ある人は非常に「代罰」ということを嫌うけれども。正直、パウロが言っているんだから。ヨハネも、

「我々のために罪を背負った神の羔羊こひつじ」

と言っている。それは審さばきという厳粛な面がある。これは神の義の一面です。聖書になぜ

「神の怒り」

という言葉があるか。パウロがなぜ、神の怒りという言葉を使うか。この「怒り」というのは、義の表現として「怒り」と言う。怒りは即ち「審さばき」になる。神の怒り、

「神の審判さばき」

をキリストが受けとってしまった。我々の方には、怒りも審さばきもなくなってしまった。そして、

「お前の罪はゆるした」

と。

「十字架から敵をゆるした」

ということは、十字架で審さばきを受けとって、そしてゆるされた。

仏教的な大悲とはそこがちがう。同じこういう言葉を私は使いますが、仏教とこの点で混同しては困る。素晴らしい言葉だから使うので、内容はどこまでも福音を言っている。

その悲しみ。キリストは、その罪の事態の悲しみをすっかり十字架をもって受けとって、そして我々の罪をゆるされた。ただ、「よしよし」なんていつて、ゆるしているのではない。自分で引き受けた。

「その友のために己の生命を棄てる」

というのは、そのような角度の友情ですね。自分が引き受けて、その友人の間違いを背負



つてしまっている。それが本当の罪のゆるしであり、また本当の憐れみである。

これが大悲です。私が今ここでいう「大悲」の内容は福音的な角度から、ただ仏的なことばを使うだけのなしです。福音の角度から仏語ぶつごを使って、仏語をもうひとつ深いところで活かすんです、日本人だから。そんな気持をへたに誤解されて、

「なんだ、仏教とキリスト教が一緒になっているな」

なんて、そうじゃないですよ。みんなキリストの光で自在に使っているだけのなしです。

●福音の光で読む

これがその

「罪のゆるされたもの、とが愆のゆるされたもの」

ということ。どこまでも私は、詩篇も全部、福音の光で読んでいます。旧約的な限界で読んでいませんか。旧約を尊重する人は、ただ歴史的な旧約の事態で見えて、それではまた律法の世界へ戻ってしまう。ユダヤ民族的な限界の中にまた戻ってしまう。

キリストはそれを突破したんですから。パウロも。それでコスモポリタンになるのではない。どこまでもキリストはユダヤ人です、人間キリストは。人間パウロはどこまでもユダヤ人。けれども、それを乗り越えてしまって、ユダヤを本当の意味で救おうとしている。けれども、ユダヤ人はあいかわらず頑かたくなである。そこをぐつちやにしないでください。

「とがその愆をゆるされ、その罪をおおわれしもの」

と。「それ（愆、罪）は見るな」と蓋ふたをしてしまった。「こつちを見なさい」といって、それでキリストの方を見る。

「十字架を見なさい。その者の罪は私が負ったから、その者を咎とがめるな、審さばくな。

審きはこつちが受けとったぞ」

と。

「人を審くなかれ」

とキリストは言われた。キリストの憐れみというものは、深いそういった内容を内側に持っている憐れみです。十字架をもっている憐れみです。

箴言の中にありましたね、「愛はすべての愆とがをおおう」という言葉が。10章12節、

「うらみ あらそい怨恨は争端をおこし、愛はすべての愆とがを掩おおう」（箴言10・12）

と。いい言葉だね。

「愛はすべての愆とがを掩おおう」

と。憐れみの愛です。「愛」といったって、中味はいろいろですから。

これと似た言葉が新約にもあった。ペテロ前書4章8節、

よろず

「7万の物のおわり近づけり、然れば汝ら心を慥たしかにし、慎つつしみて祈りせよ。8何

事よりも先ず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩おおえばなり。」（ペテロ前



4・7（8）

これは「多くの罪」と書いてあつて、「すべての罪」とは書いてない。けれども、「多く」も「すべて」も同じようなものです。今の箴言とペテロ書簡のこの二つは、ちょうど詩篇32篇の第1節と関連しているようなもの。何でゆるされて掩われたかといえ、もちろん愛であります。憐れみであります。

集会というものも、お互いに本当に相助け、相ゆるして行かなかつたら成り立たない。

「あれがこう言つた、これがあ言つた。なんだかんだ」
なんてやっていたら、みんな崩れていく。

●いつわりなき者

1 その愆^{とが}をゆるされ、その罪をおおわれしものは福^{さいわい}なり。

我々は正にその一人びとりであります。キリストにその愆^{とが}をゆるされ、その罪をおおわれているわけです。

「おおわれたから、ゆるされたから、ノホホン」

ではない。その、今言つたキリストの愛が私たちの中にいよいよ生きてくるからです。

2 不義をエホバに負わせられざるもの、心にいつわりなき者はさいわいなり。

ここでも、もうひとつ言っているね、

「不義をエホバに負わせられざるもの」

と。罪、愆^{とが}、不義。「不義」という言葉は、特に神との関係の一番切れている事態。「不虔^{ふけん}と

不義」というような言い方の、義が立たないことです。「不義をエホバに負わせられざるもの」、これもやはり深いゆるしの中に入っている。

「心にいつわりなき者」

というのは、人に対して、また自分に対して、いや実に神に対して。偽りとか策略が、あからさまな罪よりかなお悪い、ごまかしているのが。誰をごまかしても、人間にはちゃんと良心があるからわかつている。神さまは、詩篇139篇にあるとおり、

「全部これご存知である」

と。もしそれを小心翼翼として、

「どうもしようがないな、自分は」

なんて言つて、いつもそれこそ

「罪、罪、罪」

といつて問題にする。いわゆるクリスチャンがただ消極的に「罪、罪、罪」といって一向に明るい光の面を受けとらないから、

「なんかクリスチャンというのは仕方がない。力がない。意気地がないな」

なんていうことになってしまう。罪の自覚なら、徹底的な自覚です。即ち、我そのものが



罪なんだから。

「この罪、あの罪」

ではない。

「我執という自分」

を立てている。このことは次の10月31日の宗教改革のところでお話いたします、また別な角度から。

その我執ということ。自己が即ち罪の一番もとなんです。それは即ち、神さまとの連なりを切ってしまう。いくら自己を見つめたって、

「汝自身を知れ」

なんて言ったって、これは本当は知れないんです、自分だけを見ていたって。神さまとの関係において見ないと。キリストとの関係において見る。関係において見ていると、相手は絶対者ですから、聖者ですから、これは自分の姿がよくわかる、キリストを見ていれば。「神」といったって、福音書のキリストを見ればいい。福音書のキリストという神の現象体を見ていれば、自分というものがどんなものかはずきりわかる。それだから、

「キリストに降参しなさい」

と言ったんです。

ところが、ありがたいことに、このキリスト自身が私たちと同じところに――いや、私たちよりか更に深いところに――自分をおろしている。「受肉」というのはそういうことです。人間の中に本当に受肉化体して、誰よりも本当の思いやりをキリストは持っている。

「恕」という言葉が、「思いやり」という言葉です。孔子が、

「吾が道は一以て之を貫く」

と言った。この「一」とは何だと、孔子の弟子の曾子に或る弟子が聞いたとき、曾子が

「あの孔子が『一』と言っているのは忠恕なるかな」

と、「忠恕のみ」と言った。真心をもって仕えること、また本当に思いやりがあること。それが「忠恕」という。

「忠」というのは素晴らしい字だね、「中」という「中の心」。「恕」というのは「心の如し」という、如心という。「如」というのは「ごとし」というけれども、この「如」という字は「一如」の如で、ただいわゆる「ごとし」とはちがう。

「不義をエホバに負わせられざるもの、心にいつわりなき者」

「いつわりなき者」とは、そういった自分があるがままに出すもの。あるがまま――これは禅宗でいうところの「平常心」ということ――あるがままの自分というもの。

子どもを見ていると、子どもは本当にあるがままで、姿に偽りがないですね。ところが、歳をとるにしたがってだんだん適当に作っている。この作りも「偽り」です。さらけ出してない。いわゆる牧師が牧師づらをして、なにか人に説教するようなのは、それは偽りです。



私はひとつも皆さんに説教なんかしていない。私は自分をさらけ出しますから。

そういう「偽り」という、何か作っているのはダメ。これ（自分をさらけ出すこと）は本当の「真実」^{まこと}。人間がまことであらんがために――へたすると今度は、「まこと」に執着してしまふ、

「果たして私は真実^{まこと}であろうか」

なんて――そういうところからも抜けなければいけない。「ぬけている」というのは面白い言葉だよ。ぬけた心。抜けて突き^ぬ貫けているのが、別な言葉でいうと、「砕け」なんです。砕けの魂。そこには偽りはなくなってくる。

●放蕩息子の譬話

ルカ伝15章に放蕩息子の話がある。ある人に二人の息子がいて、弟の方が親父^{おやじ}さんから独立しようと思った。図形で表わすと、兄貴はどこまでも真四角だ、品行方正、学術優等みたいな。そして、お父さんのもとにちゃんと居るわけだ。ところが、弟は三角。

「私は独立したい。私の分け前をください」

と。そして遠くへ行ってしまった。父から離れた。父と切れてしまった。父との断絶。兄貴の方は父と一緒に居る。それで、弟は勝手なことをして、お金があるものだから酒を飲んだり、いろんな遊びをしたりして――いわゆる放蕩だ――すつからかんになってしまった。そのうちにそこに飢饉が起きてきたものだから、食べるものがない。仕方がないから豪農の所に身を寄せて、豚を飼^いわせられて、豚と同じ蝗豆^{いなごまめ}を食って命をやつと保っていた。さすがに、これは悪かったと、我に返った。

「お父さんの所には豊かなものがある。私はもう帰ろう。悪かった。私は神に

対し、お父さんに対して罪を犯した」

と。ということは、この断絶の事態を言っている。神からも離れ、お父さんからも離れて、自分をいいと思つたところが、

「手放しの独立、自由なんていうものは実はダメだった」

と。本当の独立は、神さまを忘れたら、ありはしないですよ。そのことは、一般の人はみんな知らない。

これが心の「破れ」の姿だ。完全に破れてしまった。「破れ」てから「砕け」となる、と書いたでしよ、『無者キリスト』（著作集第一巻）の中に。破れ砕けて帰ってきた。この砕けの姿、あるがままの自分の姿を本当にさらけ出した。これが偽りのない世界です。

そうしたら、お父さんはもう待ちに待っていたから、野良に出て行って、そして彼を抱き、口づけし云々と書いてある。普通のお父さんなら家で待っていて、

「何だ、お前は、今ごろ帰ってきて、何だつていうんだ」

なんて、ひとくさり怒つてから、しぶしぶ許すくらいのこと。ところが、このお父さんは



――本当にこれが神の愛、キリストの愛なんです――お父さんの方から野良に走って行った。

あそこは、レンブラントは間違えたね。屋根の下で迎えた。あれは野原へお父さんが駆けて行って抱いた、その姿だよ。レンブラントは間違えた。レンブラントのあの絵は素晴らしいけれども、ダメだよな、その点では。レンブラントは放蕩息子の譬話の大事な気合がわかっていない。さすが一流の画家だから、その姿は素晴らしいけれども、場所がわるい。あれはやはり野原でなくてはいかん。

これが偽りなき姿、「破れ」の姿を本当にそのま自己認識したところが「砕け」なんです。だけれども、この砕けは、手放しでは我々はできないから――ある時はできますよ、けれども――この砕けが本ものの砕けになるためには、十字架におけるキリストの砕けをいただくということなんです。

「私はなかなかまだ砕けませんが」

なんて、いつまで経ったって砕けやしないよ。キリストが私たちに代わって砕けてくださった。イザヤ書53章の「エホバの僕」に、

「あの砕けによって」

と書いてあるでしょ。あれを私はつかまえたわけです。だから、十字架でキリストは身心共に十字架によって砕かれた。槍に刺された。

●キリストの執り成し

「偽りなき」というのは、神さまの前に――なにも人の前に言うことはないよ、人の前になるとお互いさま躓きになるから――神さまの前に本当に砕けて言う。ところが、カトリックでは神父のところへ行って罪の懺悔をして、

「私はこういう悪いことをしました、どうのこうのと、これをやっている。」

「キリスト自身が私たちのために執成^{とりな}してくださっているから、坊さんはいらん」と言ったのがマルチン・ルターの宗教改革です。

「神―キリスト―我のこの直接関係でもっていきなさい」

と。祈りの世界で、神・キリストに向かって自分をさらけ出して進んでいく。マルチン・ルターは言った、

「大胆に罪を犯せ。しかし、より大胆にこのキリストを受けとっていけ」

と。ルターらしい言葉だね。ルターや親鸞の言葉は間違えたら大変なことになるよ。

「それでは、大いに私は罪を犯してやろう」

なんて。そんなことではないんです、「大胆に罪を犯せ」とは。

「くよくよするな。人間は躓いたり転んだりするが、しかし、より力強く神に進ん



でいきなさい」

と。そうすれば、本当に人を包んでいくことができるし、お互いに本当に積極的なことになっていく。

³ 我いいあらわさざりしときは終日^{ひねもす}かなしみさけびたるが故にわが骨ふるびおとろえたり。

神さまに隠したつてダメだよ。

⁴ なんじの手は夜も昼もわがうえにありて重し、わが身の潤澤^{うるおい}はかわりて夏の早^{ひでり}のごとくなれり。

御手が苦しく重くなつたと。

「神さま、すみませんでした」

と、主さまの前に平伏して進んで行くわけだ。

⁵ 斯^{かく}て我なんじの前^{みまえ}にわが罪をあらわし、わが不義をおおわざりき。

あなたの御前に、神さまの前に行きました、それでやって来ましたと。

我いえらく、わが愆^{とが}をエホバにいいあらわさんと。斯^{かか}るときしも汝わがつみの邪曲^{よこしま}をゆるしたまえり。

そのとおり。私たちにおいては、キリストはいつもその執り成しをなさる。キリスト自身が聖霊の執り成しをなさる。キリストの執り成しです。キリストは大祭司ですから。私たちには大祭司は一人しかいないから、他に坊さんなんかいない。

私もあなたの方の罪の執り成しなんかない。できないです、だいいち。大祭司のキリストだけが執り成してくださっている。聖霊が執り成してくださっているから、みんな心配いりませんよ。

⁶ されば神をうやまう者はなんじに遇^まうことをうべき間になんじに祈らん。そうなつてくると、

大水あふれ流るるとも必ずその身におよばじ。

⁷ 汝はわがかくべき所なり。なんじ患難^{なやみ}をふせぎて我をまもり、救いのうたをもて我をかこみたまわん。

素晴らしい言葉があるね。

「救いのうたをもて我をかこみたまわん」という。

●聖霊の大慈

そこで、まだ旧約の世界だからはっきりと出てないから、私がこれから話します。私になぜ、「大悲大慈」とひっくり返して書いたかという、今度は、「大慈」、いつくしみ、憐れみの方です。「大悲」は罪のゆるしの方。



「大慈」は何かというと、聖霊のこの愛を、力ある聖霊を与えてくれるのが、これが新約の「大慈」なんです。今日初めて私はこういう言い方をするよ、「大悲大慈」なんて。

御霊の世界の真理の直感というのは凄いから、パーッとくるんです。私は今日、「大悲大慈」と書いて、うれしくってしょうがないんだ、正直。罪のゆるしから聖霊の加持ということになる。これが「大慈」なんです、力強いんです、こっちは。愆をおおわれ、ゆるされたばかりではない。それに、

「大慈の御霊を賜りたる者はさいわいなるかな」

と、もう一節付け加えたいわけだ。だから、

「聖書の奥を御霊は読ませる」

と言う。しょうがないやつだね、この小池というのは。

7 汝はわがかくるべき所なり。なんじ患難^{なやみ}をふせぎて我をまもり、救いのうたをもて我をかこみたまわん。

と。私たちは救われた。ゆるされたばかりではない。今度は救われてしまった。ゆるしから今度は救いにいく。

「十字架で救われた、救われた」

と言っているよ、みんな無教会でも。ところが、本当の救いというのは、聖霊がなければ本当の救いではない。キリストの救いとは何かとえば、この聖霊をいただいたことが本当の救いなんです。

「私は救われています」

とはつきり言えるのは、聖霊が来ていなければ言えない。「救いの確かさ」なんていう言葉があるんだよな。

「十字架をはつきり受けとったかどうか。まだどうも質がうすいようだ」

なんて。そうじゃないですよ。

救いの事態は、御霊がやってきました。このキリストの愛という――「愛」という言葉がどうも抽象名詞で困るんだけど――愛のキリストなんです。「キリスト即愛」なんです。いつか、コリント前書13章をお話したときに、

「愛は……、愛は……」

と書いてあるところの、「愛」という言葉は「キリスト」という言葉に切り替えて、

「キリストは……、キリストは……」

と読みなさいと言いました。「愛は」なんていうと、

「そうか、そういう愛は私たちはどうして持てるか」

なんて。どうしたって持てやしないです。コリント前書13章でいつている「愛は」は、「キリスト」ということ。これは、「キリストは」というと、今度は持てるんです。キリストという恵みそのものは、



「私を無条件に持て」

と言っているんだから。

「私を受けとりなさい。私はお前の中に入って生きるぞ」

と言っている。

「キリストを生きる」

なんていう言葉があるでしょ。それを形容詞で言っただけですよ、そんなものは。

「キリストは私の中に生きています」

とはつきりといえる。自分がどんな罪びとであろうと、そんなことは関係ない。罪びとの中に入って生きるんだから、キリストは、しょうがないやつの中に入ってくる。

「もう少し私は聖書の勉強をして、ギリシア語やヘブライ語がわかって、どうのこうの」

と、そんなことではないですよ。

ギリシア語もヘブライ語もおおいにやつてもらいたい。けれども、ギリシア語やヘブライ語のもうひとつ奥の世界を、もうひとつ奥の根源語を読めなかったら、いくらギリシア語やヘブライ語をやったってダメだという話だ。それよりも日本語で結構だ。しかし、日本語の奥に根源語が読めるためには、聖霊がきたら読める。聖書の訳はどうだっていいよ、そんなものは。その誤訳をとおして本当の世界が読めるだけの魂になれるんです。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロがいったのは何事か。「儀文」というのは「グラマテイク」だよ。

「グラマーは殺し、霊は、ガイストは、聖霊は活かす」

ということ。

まあ若い人は少しギリシア語やヘブライ語の勉強をしてくださいよ。そんなことは相対的な問題です。私は正直、無教会では真っ先にヘブライ語をやった。ヘブライ語のクラスを3年間持った。塚本先生に命ぜられて、私はやった。歴史的な事柄を、ヨナ書というのを全部読んだり、創世記や詩篇を読んだり。ただ預言者やヨブ記はむずかしいから、これはとてもその3年間ではできなかった。

けれども、私はヘブライ語をかじったって、ギリシア語をかじったって、そんなことは屁とも思っていない。大事なのは日本語です。日本語というのは素晴らしい。まあとにかく、御霊のキリストの世界に入ってしまうと、もうなにか、しゃべっているのが面倒臭くなってしまうんだ、本当は。

●図太い信仰

そういう「救いのうたをもて我をかこみたまわん」と、囲んでくださるという。

8 われ汝をおしえ、汝をあゆむべき途にみちびき、わが目をなんじに注めて



でござん。

この「われ」というのは神さまの言葉として、もちろん受けとらなければダメです。ダビデではない。

9 汝等わきまえなき馬のごとく驢馬のごとくなるなかれ。かれらは轡たづなのごとき具をもてひきとめずば近づきたることなし。

汝等わきまえなき馬のごとく驢馬のごとく、自分の欲望にしたがって動いてはいかんと。

10 悪しき者はかなしみ多かれどエホバに依頼むものは憐憫にてかこまれん。

これは大事です。「悪しき者は」なんて、そんなところはどうかだっていい、人のことは。我々自身が悪しき者です。けれども、

「エホバに依頼むものは憐憫にてかこまれん」

と。神さまに依り頼む者。ということは、憐憫が囲んでいるから依り頼めるんですよ。逆に読まなくてはいかん。

「我々は神の憐れみに、キリストの憐れみに囲まれているから、いよいよ依り頼まざるを得ません」

と。

「依り頼めば、憐れみが来る」

なんて思ってはいかん。

「依り頼み方がわるいから、私にはなかなか憐れみがこない」

なんて、逆になっちゃいます。もつと図太い信仰にならなくてはダメですよ、皆さん。「図太い」ということは――言葉がわるいけれども――

「自分に本当に絶している」

ということなんです、「図太い」ということは。自分が何かできると思っているうちは図太くなれない。

「私はもうダメだ。しかし、あなたがものすごい」

と言っているのが、私が今言っているところの「図太い」ということ。

「あなたがもの凄いから、私の自分の側の信仰だとか、実存だとか、勉強だとか、そんなことはもう問題にしません」

と。そうすると、あなたの側の素晴らしさがやってくるから、今度はこつちにももの凄い回転が始まる。依り頼まざるを得ない、働かざるを得ない、勉強せざるを得ない、人を愛せざるを得ない。そういう力が今度は上から来る。それを何か制限して、

「どうだ、こうだ。先生がこう言った、ああした」

なんてやっているうちは、いつまでたつてもダメです。そうでしょ。そういう本当に突き抜けたところに来てなくては。私が言ったり、したりしていることに、何かかにかに、気を取られてはダメですよ。人間小池なんてのに真似しないでください。



●大悲大慈

エホバに依頼よりのたのむものは憐憫あわれみにてかこまれん。

とは、

「憐憫にて囲まれるがゆえに、われはエホバに依り頼むのである」

と。その聖書の中にそう書いておけ。いいから。なるほどこういう読み方をするんだなと。

「ただしき者よエホバを喜びたのしめ。凡てこころの直きものよ、喜びよば

うべし。

これが本願の角度から聖書を読むことなんです。本願の角度から。楽しいね。

ここは、本当の福音が語られています。私は自分が主観的に言っているのではない。人数がいくら少なくても、これは本当の意味における原始力を持っています。ですから、皆さんはここを出たら——どこへ行ってもいいよ——そこで本当に魂が限りなく祝福されるかはどうか知らんよ。

ということとは、私がなぜそういうことが言えるかというと、私は本当に自分を何ものともしていないからです。全く無の世界に無者修行をしているから。キリスト一切が動いているから。仏教のことを何をしゃべろうが、いつも中心は、本当に深き中心はキリストだけなんです。そこを間違えては困る。

「憐憫にて囲まれる者はエホバに依り頼まざるを得ない」

と。そのように私たちはキリストの聖霊をいただいたのを、これを「大慈」という。「大慈大慈」は——仏教ではそういう言い方をしない——これは福音の言い方です、大悲大慈というのは。今日初めてあなた方は聴いたわけだ。その大悲大慈の事態で私たちはいいよ力に溢れていきます。

「すべての病いをいやし、すべての不義をゆるす」

と、詩篇103篇にあるとおり。この「ゆるす」ばかりでなくて、今度は本当の力、病にかえて生命を、また不義にかえて本当の恵みを、本当の恵みあるところの実存を展開せしめ給うという。これが32篇。もうなんと私は同じところを読んでも、必ず別なことが出てくるから不思議だよな。聖霊の世界は限りなく、まだたくさんあるけれども、今日はこのへんでやめましょう。

●祈り

昔いまし、今いまし、後かならず来給うところの、我々の贖い主キリストさま。今日は、詩篇32篇をとおし、アウグスチヌスがその生涯を貫いてあなたの御恩寵を、

「始めも中も終わりもこれ恵みであった」

と彼は言いましたが、本当にあなたの恵みに囲まれて、歌に囲まれているような私たち。天使のこの歌が天界において歌われています。どうぞ、私たちもまた天地相こたえてキリ



ストのこの大悲大慈を本当に歌いつつ進んでまいります。

私たちの側の何ものでもありません。私たちの碎けですらありません。主イエス・キリストが全的に砕けてくださったから、「はいっ」と言うだけであります。あなたが本当に――空気が私たちを囲みまた空気を吸っているように――「わが霊は」と言つて、私たちの中に知らずに臨んでくださっている、その御霊の事態を「はいっ」と言つて受けとるだけであります。

神さま、かくして、御霊を魂が吸っていないければ、この魂は死んでしまいます。しかしながら、御霊を吸っているがゆえに、私たちは生きています。感謝いたします。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず。キリストわがうちにありて生きたもうなり」

このパウロの告白は全く御霊にあつてのパウロの告白でありました。感謝いたします。

いよいよ、このようにしてこの集会の一人びとりは、それぞれその様、在り方はちがつていても、この御霊を受けとることにおいて――受けとり方はどうでもいいです――本当に受けとりつつ進んでまいります。

かくして、神さま、私たちはもう

「主イエス・キリスト、南無キリスト」

と呼び奉れば、直ちにあなたの本願が、本願のあなたがやってきてくださるがゆえに、感謝であります。本当に圧倒されます……（異言）……。

主イエス・キリストのこの驚くべきご恩寵の中に、いよいよ

「われ汝のうちにあり、汝わがうちに」

と言つて、パウロと共に、ヨハネと共に、またペテロと共に進んでまいります。

「原始に還れ^{かえ}」

と。本当に私たちはこの根源の原点に還つて、帰りつつ行くことが本当の前進であることはいよいよ身をもつて証しすることができますように願ひ奉ります。

やがてまた京都の集会がありますが、どうぞ、かしこに集まつてくる者たちをいよいよお捕らえくださらんことを願ひ奉ります。

また、昨日の集会（キリスト道講演会『南無キリスト』1976/10/23 YWCAにて）において来たところの人たちが、昨日の話が何かの種蒔きとなつて、それが芽をふき出し、そして根をはり、あなたのみ栄をあらわすところの花となり木となつていくことができますように切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により献げ奉る。アーメン。

